

コラージュ作品に表現される母性イメージに 関する探索的研究（第1報） ——形式分析を中心に——

申 ジン ア

要 約

本研究は、妊娠や出産の経験のない青年期後期及び成人期の発達段階にいる未婚女性を対象に、母性をテーマとしたコラージュ制作を試み、コラージュ作品を通してどのような母性イメージが見られるのかについて調査を行った。なお、本稿においては、母性イメージを探るための第1歩としてコラージュ作品を通して表現された母性イメージの表現特徴を主な色彩、主な切り方、中心性の3つの形式的な側面に焦点を当てて、検討を行った。その結果、母性イメージとして表現されたと思われるいくつかの表現特徴を明らかにすることが出来た。主たる色彩においては、青、橙・白の順に多く使用され、これらの色彩の特徴と母性イメージとの関連可能性について考察を行った。主な切り方としては、一般的な大人の表現特徴と異なる楕円・円形の切り方の使用が多く見られ、母性イメージの表現特徴の一つとして明らかとなった。最後に、作品の中心に置かれた切り抜きを分析した結果、母性イメージの表現特徴と母性をテーマとした作品の台紙の中心には作品のキーワードとなる母性イメージや最も母性を感じる切り抜きが置かれやすい傾向が明らかとなった。

I. 背 景

育児や子育てと関連されてよく使われていた「母性」という言葉は、今日一般的な日常用語としても頻繁に使われている。我々が最も接しやすい国語辞典における一般的な母性の定義をみると、広辞苑第6版（2008）は「母として持つ性質。また、母たるもの」と定義されており、日本国語大辞典（2001）では、「母性とは女性が母親として持つ性質、子どもを守り育てようとする母親の本能的な性質」と記されている。つまり、母性とは子どもを守り育てようとする、女性が生得的に持つ性質であると言える。しかし、その定義からは、母性がどのようなものなのか掴むには不明確で漠然と感じる。実際、大日向（1988）と石崎ら（1996）は、これらの母性に対する定義は、曖昧で不明確であり、漠然としているため各人各様の解釈の余地があると指摘している。また、松村（2005）も、母性概念の解釈が様々で、母性という用語に含まれる意味について統一した見解があるわけではないと述べている。このように、漠然で曖昧である定義の中から、母性をどのように認識しており、どのようなイメージを持って使っているのだろうか。一方、石崎ら（1996）は、心身症の発症には、小児期からの親子関係、特に母子関

*臨床心理学研究科 博士課程（前期）

係が深い関わりを持つ可能性が指摘されているため、患者の母性性のイメージの把握が必要であると述べている。そうした側面からも、母性イメージにどのようなものがあるのかについて探ることは、臨床場面でクライアントの母性イメージを理解するための一つの手掛かりとして大事であると考えられる。

Ⅱ. 問題

日本人を対象に行われた母性イメージに関するいくつかの調査（石崎ら、1996；寺田ら、1986）により、「やさしさ」、「愛情」、「あたたかさ」のような情緒的な抽象語や、受容と安心感を表すような言葉が連想されやすいことが分かった。しかし、どうやら我々の中に有する母性イメージにはそれらが全部ではないようである。心理療法の場面で表れる箱庭や夢、描画等、イメージを介して表現される母性イメージをみると、上述されているようなすぐ思い浮かぶイメージのみではなく、それとは程遠いと感じるイメージが母性イメージとして表現されることもある。その一つの例として、河合(2009)は、実際相談に来られた学校恐怖症の少年の事例を通して、少年の夢に表れた「渦」のイメージと母性イメージとの関連について述べている。勿論イメージは多くのことを集約しているため、その意味は極めて多義的である。よって、あるイメージに一義的なことは言い難い側面もある（河合、1991）。しかし、多義的であるからこそ、イメージを用いた表現によって言葉では表現しきれないイメージも得ることが出来ると考えられる。

しかし、実際母性イメージに関する先行研究には、イメージを媒介としたイメージ調査は少ない。いくつかの研究を見てみると、まず、1986年に寺田らは女性の発達段階に伴い、母性の捉え方に微妙なズレがあることに着眼し、母性イメージの相違から母性意識を把握する手掛かりを得るため、女性の発達段階を代表とすると考えられる青年期女子47名、妊婦68名、3

歳児の母親91名の3群を対象に、母性から連想する言葉、または母性行動を表していると思われる言葉を記述してもらう言語連想法による母性イメージについて調査を行った。その結果、母性から連想される言葉として3群共に共通的に多く見られた言葉には、「やさしさ」、「愛情」、「あたたかさ」という順の情緒的な抽象語と、それに続いて「授乳」、「抱く」順の母性行動を表す言葉が見られた。また、3群の間における母性イメージの相違も見られ、母性発達段階または子どもの成長発達に則して漠然とした母性のイメージは具体的なものへと推移することが明らかとなった。

そして、この研究結果を基に、女性性の肯定と否定につながる文章への反応を見る質問紙と絵に表現されるイメージを知るための描画テストを用いた調査が青年期女子106名を対象に、翌年に行われた（寺田ら、1987）。その結果、質問紙の結果からは女性性ないしは母性イメージを肯定的に受け止めている回答が多くみられた。また、自分と子どもの絵を描いてもらう描画テストの結果からは、子どもを抱いている姿が多くみられた。この「抱く」イメージは、1986年の言語連想法を用いた調査でも多く見られた母性行動を表す言葉の1つであり、よって、「抱く」イメージは青年期女子における一般的な母性イメージとして考えられると考察している。

今関(1994)は、これらの調査結果から得られた、母親という言葉からイメージされる表現を基に、250項目の質問紙を構成した。そして、青年期女子の母性イメージの特徴を探ることを目的とし、作成した質問紙を用い、思春期女子の高校生147名、青年期女子の短大生145名、1歳から3歳児を持つ母親89名の3群を対象に調査を行い、高校生から短大生にかけて短期間に母性イメージが肯定的に発展し、短大生は肯定的反応の著明な時期であるという結果を得た。この結果から、性同一性の獲得期にある女子大学生は、母性を十分認識し、母性意識を備えていることが言えると共に、青年期女子の母性性

を探る他の先行研究と一致した結果を得たと述べている。

一方で、一般人と心身症患者との母性イメージに相違があることを明らかにした研究もある。石崎ら（1996）は、母子関係に問題を有する心身症の問題発見や病態把握の指標の開発を目指すための基礎的調査として、現代の日本人の持つ母性性のイメージを調査した。その結果、母性性のイメージとして最も多い回答として「やさしさ」であり、その他には「愛情」、「包み込む愛」、「温かさ」、「思いやり」、「微笑み」などの回答が多く得られ、この結果は1986年の寺田らの研究結果と共通してみられたと報告している。それに続き、同年に行われた石崎らの研究である「心身症患者の母性性イメージ」の研究では、心身症患者と健康であるとされる一般人とを対象に母性イメージを調査した結果、両群ともに母性性を女性性とは異なるイメージを持っている一方、心身症患者群と一般人群との間に母性イメージにおける相違点もいくつかあることが明らかとなった。その一つとして、一般人群には見られる年齢による母性イメージの傾向の違いが、心身症患者群には見られないことが分かった。一般人群には、年齢による社会的価値観の変化や育児経験により、高年齢になるにつれ母性イメージに対して「温かさ」「包容力」の回答が少なくなり、「厳しさ」「忍耐」の回答が多くなることに対して、心身症患者群においてはこのような傾向が見られなかったと報告している。これについて、心身症患者の心理的な背景として社会的価値観の変化に対処しきれない側面が母性イメージの年齢差が見られなかった一つの原因として考えられると考察しており、心身症患者と一般人の母性イメージは異なる部分があることが明らかにされた。

これらの研究から、母性イメージとして「優しさ」、「包み込む」のような情緒的な抽象語が多いこと、女性の発達段階に伴って母性イメージも変化すること、心身症患者と一般人との母性イメージに相違があることが明らかとなった

ことが分かる。しかし、これらの研究の調査方法は、性別と関連のある質問項目で構成された質問紙を用いた調査と言語連想法であり、言葉を用いた調査が主に行われている。言葉の持つ意味は回答者により異なるイメージを持つ場合も考えられるし、同じ言葉でも違うイメージを抱いている可能性も考えられる。よって、母性イメージに関する研究として、絵画のように視覚的イメージの表現を用いた調査を試みることは意味を持つと考えられる。一方、描画テストを用いた寺田ら（1987）の研究は、現在の母子画に当たるものであり、回答者にとって最初から子育てや乳幼児を世話する母親の姿に限定されやすく、幅広い母性イメージを得ることは難しいと言えよう。よって、母性イメージを探るためには、より広い母性イメージが見られる方法が必要であろう。

そこで、本研究では、イメージ表現の一つであるコラージュ・アクティビティを用い、母性をテーマとしたコラージュ制作を試み、コラージュ作品を通してどのような母性イメージが見られるのか、母性イメージにどのような表現がなされるのかを明らかにしたい。なお、既に述べたように、母性イメージの先行研究により、母性イメージは育児経験や女性の発達段階によって異なることが明らかとなっている。よって、本研究では、調査対象者を妊娠や出産の経験のない成人期の発達段階にいる未婚女性に限定して調査を行う。

Ⅲ. 目 的

妊娠や出産の経験のない青年期後期を含めた成人期の発達段階にいる未婚女性を対象に、母性をテーマとしたコラージュ制作を試み、コラージュ作品を通してどのような母性イメージが見られるのか、また、母性イメージにどのような表現がなされるのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本稿においては、イメージ表現を通して表れる母性イメージを探るための第1段階と

してコラージュ制作を通して表現された母性イメージの表現特徴をコラージュ作品の形式的側面に焦点を当てて、検討していくことにする。

Ⅳ. 方 法

1. 作品収集

A. 調査協力者：関東圏在住の妊娠や出産の経験のない青年期後期を含めた成人期の発達段階にいる未婚女性20人（平均年齢：26.7歳，SD：8.88）

B. 実施期間：2015年7月～10月

C. コラージュ作成用具：八つ切り画用紙，ハサミ，スティック糊，統制された素材（下記）

D. 素材の統制：全ての調査協力者に共通の素材を用意した。共通素材の内容は箱庭療法の使用玩具，ロールシャッハ・テスト等を参考として作成された内容分析項目（杉浦，1993）と，西村（2015），池野谷（2007），磯田（2004）の研究などを参照し，宇宙，自然・風景（山，海，滝，洞窟，大地，等），植物（花，木，等），動物，食べ物，小物，物体，インテリア用品，家具，その他（仮面，キリスト像，イラストなど）等の項目を考慮し，既存の雑誌や写真集から調査者が選び出した。さらに，選び出した雑誌記事や写真をカラーコピーし，項目別に冊子状にしたものを提示した。また，本研究で提示した共通素材の中には，親子の姿の写真や育児関連用品は含まなかった。従来の研究で得られなかった母性イメージを探るために，親子の姿を含めた写真や乳幼児の子育ての関連用品（赤ちゃんの靴や洋服，哺乳瓶，ゆりかごなど）の写真など，直接的な子育ての関連素材をあえて選択せず，自然風景や動物，物体などのような子育てと直接関連がなさそうに見える素材を主に共通素材として提示することにした。そうすることで，それらの素材のどのような特徴が母性のどのような側面やイメージに結びつき，どのような表現がなされるのかを見ることができると考えた。但し，人のイラストやシルエットまたは風景の中に一緒に写っている人の素材は

特に制限せず素材として提示した。また，人の母親と子どもの姿は提示しなかったものの，動物の写真において親子の姿が写っている素材が含まれており，素材の偏りをできるだけ少なくすることを心掛けて素材を選択した。

E. 手続き：関東にある大学の心理相談センターの一室及び図書館の会議室，会議室，調査参加者勤務先のうち調査参加者の希望に合わせて個別法により調査を行った。母性をテーマとしたコラージュ制作を行った後，コラージュ作品に関する半構造化面接を行った。コラージュ制作に費やす時間と制作方法は，自由とし，半構造化面接の際には調査参加者の同意を得た上で録音を行った。

2. 分析方法

A. 作品に対する評定

(1) 評定者：筆者を含む臨床心理学を学ぶ大学院生9人が作品ごとに評定を行った。評定項目は，母性をテーマとしたコラージュ作品の表現特徴を捉えるために，杉浦（1992），滝口ら（1999），西村（2015）の研究で用いられた形式分析の項目を参考にし，その中から本研究では，主な色彩と切り方，中心性の3つの評定項目を取りあげ，評定を行った。

(2) 手続き：主な色彩と切り方，中心性の有無の評定項目により構成された評定質問紙を作成し，質問紙を用いて作品ごとに評定してもらった。

(3) 評定項目と内容

①主な色彩：主な色彩の評定においては，杉浦（1992），西村（2015），滝口ら（1999）の研究を参考に13色を色彩の評定項目として設定し，作品を代表とする主たる一色とそれに次ぐ2色の，計3色を作品ごとに選択してもらった。

②主な切り方：切り抜きをどのように切っているかについて調べるため，主な切り方について評定を行った。切り方は，西村（2015），杉浦（1992），滝口ら（1999）の研究を参考に，四角（切片が四角形のもの），円形・楕円（切片が円形または楕円なもの），物の形（対象物に沿っ

た切り方をしているもの）、不定（どちらにも該当されない切り方）の4つの項目を設定し、主たる切り方（主に使用された切り方）一つ、それ以外に使用されたと思われる切り方を作品ごとに評定してもらった。

③中心性：杉浦（1992）、滝口ら（1999）の研究を参考に、切り抜きの構成が中心性を持っているか否かについて評定を行った。評定は、作品ごとに中心性があると判断した場合には、「中心性が有る」のところに○を、ないと判断した場合には、「中心性が無い」のところに○を付けてもらい、評定を行った。

B. 補足資料

補足資料として録音によるインタビュー内容を逐語化し、分析に用いた。また、コラージュ制作中に行う制作者に関する調査実施者のメモも補足資料として用いた。

V. 結果・考察

1. 主な色彩

本研究においては9名の評定者に、それぞれの作品について主たる色彩1色（その作品を最も代表する色彩）とそれに次ぐ色彩2色、計3色を選択してもらった。そして、選ばれた3色のうち過半数の5名以上に選ばれた色彩の中で、主たる色彩においても一番多く選ばれた色彩をその作品の主な色彩として採用し、集計を行った。その結果を基に、主な色彩として選ばれた色彩について、イエーツの修正式を用いたカイ二乗（ χ^2 ）検定を行った結果、5%以下の有意水準で、有意差が認められた（ $\chi^2 = 13.213, df = 6, p < .05$ ）。

表1は主な色彩の順位を示す。主たる色彩として青が20名中9名（45%）と最も多く使用されており、次に橙と白がそれぞれ3名（15%）、緑が2名（10%）、水色、黒、灰色が1名（5%）と続いた。そして、主たる色彩として使用されなかった色彩は、紫、赤、桃色、茶、ベージュ、黄であった。

主な色彩として多く使用されたのは、青とそ

表1 主な色彩の順位

順位	使用人数 (20人中の%)	色名
1位	9 (45%)	青
2位	3 (15%)	橙・白
4位	2 (10%)	緑
5位	1 (5%)	水色・黒・灰
8位	0 (0%)	紫・赤・桃色・茶・ベージュ・黄

の次に橙と白であり、主にこの三つの色彩について考察を行った。

青色は最も多く使用された色彩であり、青が主な色彩として評定された作品には、作品A, B, C, E, G, I, N, Q, T（付録）がある。これらの作品からすると、多く使用された理由として、青色を含む水との関連のある素材が多く使用されたためだと考えられる。水と関連のある素材は青と評定されていない作品にも多く使われており、青色の海は20作品中11作品に使用され（作品A, B, C, E, I, K, N, Q, R, S, T）、滝が3名（作品E, N, O）、その他、間欠泉の切り抜きが1名（作品N）と、20作品中15作品に海や滝などの青色の水と関連のある素材が使用されていることが分かる。そして、青色と評定された作品の中で水と関連のあるもの以外の素材として使われたのは、空（作品C, I）と青色の洞窟（作品G）の切り抜きであった。

このように多くの作品で使われた青色はどのような母性イメージとして使用されたのだろうか。青は、落ち着き、沈静、安息、静寂、平和、平静等の感情を引き起こす（松岡, 1995）。特に、本研究で多く使われた海の素材は暗い背景の夜の海や深い海の中の素材であり、実際インタビューでこれらの切り抜きに対して「落ち着く」（作品R）、「安心できる感じ」（作品E, R）、「静かな感じ」（作品R）、「穏やかにみえる」（作品T）、「優しい感じがする」（作品Q, T）などが語られた。これらの語りから、青色から引き起こされた安心感や落ち着きなどのような感情が母性イメージと一致したため、青色の素材が多く使用されたと考えられる。また、海の

素材に対して「羊水のように見える」（作品A, B, C, G, I, K）と語られた制作者が多く、暗い青い海から「羊水」が連想されやすかったという素材の特徴により、青い海の素材が多く使用された可能性も考えられる。よって、このように、青い素材の色とその素材の特徴から引き起こされた感情が母性イメージとして表現されたと考えられる。

次に多く使用された色彩は橙と白である。橙色は青と同様に、主たる色として評定されなかった作品においても多くみられた色彩であった。発達によるコラージュ表現特徴について調査を行った杉浦の研究（1992）では、成人における橙色の使用は3.5%を占め、幼児、小学生、中学生、高校生、高齢者を含めた全年齢において主な色彩としてあまり使用されなかった色である。本研究の調査対象者の大きさなどが異なるため、割合の差について明確に述べ難いが、本研究では、15%の使用割合を占め、2番目に多く使用されており、主たる色として評定されなかった作品においても使用頻度が多くみられ、母性イメージとして表現された可能性について検討してみる必要があると考えられる。橙色は、暖色系に分類され、暖かい感じを与えると言われている。また、橙色が連想されやすい単語として、家庭や幸福、愛、等が選ばれ、家庭や愛のようなイメージにも結び付きやすい（大山, 1994）。実際インタビューで多く語られた内容の一つとして、家族と関連する語りが多かったことから、橙色と家族に関連する母性イメージとの繋がりについての可能性も考えられる。また、本研究で使用された橙色の素材をみると、ロウソク（作品B, C, F, H, L, M）、橙色のライト（作品E, F, I, M, O, Q, R）、夕暮れの空（作品O）、夕暮れの海（作品J）、橙色の宇宙（作品I, T）などがあり、橙色の光が多い。インタビューでこれらの素材について、「温かく感じる」（作品B, H, J, L, M, T）、「ほっとする感じ」（作品F, S）、「色のトーンが落ち着く感じがする」（作品F, S）、「優しい感じがする」（作品H, O, Q）、「柔らかい」（作

品R, T）と感じ、このような感覚が母性イメージと一致したと語られた。これらのことから、母性がテーマであるコラージュ制作において、母性イメージで多く語られた「ほっとする」、「温かい」、「優しい感じがする」、「落ち着く」などのような感覚が橙色のイメージで引き起こされた感情と一致して母性イメージの表現として多く使用されたと考えられる。

橙色と同じ割合で多く使用された色は白である。白色は純潔、素朴、清潔さ等の感情を引き起こすと言われており（松岡, 1995）、3つの作品（作品F, H, S）が白を主たる色彩として使われたと評定された。この3つの作品で使用された白色の切り抜きをみると、白い食器（作品F）とリネンのテーブルクロスとナプキンなどが写った切り抜き（作品H）がある。作品Fの食器の素材は大きいサイズで台紙の中央に貼られている。そして、作品Hに使用された白の素材であるリネンの切り抜きもかなり大きいサイズで貼られており、二つの切り抜きは評定者に強いインパクトを与えた可能性が考えられる。また、インタビューでは、リネンの素材について、制作者自身のお母さんが好きな物であると語っており、食器に対しては食べ物を意味すると語られ、素材の色よりは素材の内容が母性イメージと繋がりやすかったため選択されたと考えられる。そして、主な色が白と評定された残り一つの作品である作品Sを見ると、他の作品より空白が多く、白い素材の使用としてではなく、空白により主たる色彩として評定された可能性が高いとみられる。よって、これらの作品からは白色が母性イメージと何らかの繋がりを持っていると考えるのは難しい。

一方で、白色の切り抜きを使用した他の作品を見てみると、作品Iで使用された白色の月と作品Tで使用された白色の花に対して語られたインタビュー内容から共通的に語られた内容として「白の色が、凜としてしっかりしている母性のイメージが感じられる」があった。つまり、「凜としてしっかりしている母性イメージ」が白色から引き起こされた感覚と一致し、使用さ

れたと考えられる。また、全体のインタビューを通して、母性イメージとして「素朴な感じ」（作品O）、「ぎらぎらしないイメージ」（作品O, R, T）、「強い色よりは、落ち着いている色の方が母性のイメージにつながる」（作品I, R, T）という語りが多く、このような感覚が白色により引き起こされる清潔さ、純潔、素朴な感覚と繋がり、母性イメージとして表現された可能性も考えられる。

これまで、母性イメージをテーマとしたコラージュ作品に多く使用された色彩と母性イメージとの関連の可能性を述べてきた。しかし、既に述べたように、インタビューの内容から、多く使用された色彩はその素材の色だけで選択されたというよりは、素材の内容も選択に影響を与えている。そのため、本研究で多く使用された色彩が母性を感じさせる色であると判定するより、それらの色がどのような母性の側面に結びつきやすく、それらの色の持つ特徴が母性イメージとしてどのように表現されるのかをつかむための手掛かりとして考えられよう。

2. 主な切り方

切り方の評定においては、9名の評定者に、それぞれの作品について主たる切り方（主に使用された切り方）一つと、それ以外に使用されたと思われる切り方を選択してもらった。そして、選ばれた切り方のうち過半数の5名以上に選ばれた切り方の中で、主たる切り方においても一番多い評定者に選ばれた切り方を作品の主な切り方として採用し、集計を行った。その結果、20名中13名（65%）と四角が一番多く使われ、次いで円形（楕円を含めた）が20名中6名（30%）と次に多く使用された（表2）。また、使用された主な切り方（四角、円形、物の形）に対して、イエーツの修正式を用いたカイ二乗（ χ^2 ）検定を行った結果、5%以下の有意水準で、有意差が認められた（ $\chi^2 = 9.113, df = 2, p < .05$ ）。

コラージュ制作をするとき、最初に制作者は、用意された雑誌類の中から欲しいパーツを

表2 主な切り方

	四角	円形	物の形	不定	計
人数	13	6	1	0	20
(%)	(65)	(30)	(5)	(0)	(100)

選択し、ハサミで切り取る作業をする。そして、切り取ったパーツをさらに四角や円形など、素材の形を決め、もう一度ハサミでパーツの中からいらぬ部分を切り除く。このような「切る」という行為について、中村（1999）は、治療関係場面における切る行為はクライアントの思い入れの感情が動いており、自我の投影的な選択機能の動きを内包していると考えられると述べている。また、台紙については、箱庭の砂場、描画法の画用紙枠が心の機能する場であるように、コラージュ技法における台紙空間は心理的空間を投影する場であると述べている。さらに魚住（2008）は、素材の切り出す体験を明らかにすることを目的に行った調査では、素材を切り出すことは、いらぬ箇所を排除する目的のみではなく、素材の印象を変える、素材の印象を活かす、違うイメージを作る等のような目的もあることを明らかにしている。これらのことから、治療場面に限定されずコラージュ制作における表現の一つの方法として切り方は、作品を理解するにあたって大事な意味を持っていると言えよう。

本研究で最も多く使用された切り方は四角（65%）で、その次が楕円を含めた円形（30%）である。杉浦の研究（1992）では、成人の切り方において、四角が45.6%で一番多く、次に物の形が36.5%、不定が12.3%、手でちぎる3.5%、円形が0%の順であった。また、統合失調者と一般成人のコラージュ表現の違いについて調査を行った今村（2001）の研究では、切り方の評定項目をより細かく設定している（四角形、物の形、不定形、丸、三角形、多角形、手でちぎる、創作、その他）ものの、一般成人の主な切り方として最も多く見られたのが86.8%を示した四角形で、その次に物の形が61.4%、

不定が58.8%の順であり、丸は7%で、最も少なく使用された切り方であった三角形、手でちぎる、創作、その他の2.6%の次に少ない割合を占めている。これらの二つの調査は、調査人数と評定項目は異なるものの、使用割合の順位からすると、同じ傾向を表していることが分かる。つまり、一般成人において最も多くみられる切り方として、四角形があり、円形または丸の切り方はそれほど大きい割合を占めていないと言える。この結果からすると、本研究において四角の切り方が一番多く見られたのは、成人において多くみられる傾向が本研究においても見られたと考えられる。一方で、一般日本人において使用頻度が少ない円形の切り方が本研究においては30%で2番目に多く使用されたことは、注目する必要があるだろう。実際、主な切り方として円形と選ばれた作品の中でも四角と円形の両方の切り方を使用された作品が多く、逆に主な切り方として四角と選ばれた作品でも、円形を使用された素材も存在している。すべての素材を丸く切ったり、または一つあるいは、いくつかの素材のみ丸く切ったりした作品のインタビューで語られた内容には、「角がない、丸い方が母性っぽいかなと思って」（作品O）、「角があるより丸い方が良かったので」（作品M）、「尖ったよりは丸みがあった方が柔らかい優しいイメージがして」（作品L）、「包まれている表現をしたくて」（作品P）、「丸い方が優しい感じがして」（作品Q）、「母性イメージにはあまりトゲトゲしないイメージ」（作品M,R）等が語られた。特に作品Rでは「個人的に家事があまり好きじゃないこともあって、役割的な仕事のような家事を表す素材として洗濯板とほうきを四角に切った」と述べたり、「海は冷たくも見えるから四角に切った」と語り、四角の切り方を否定的な意味合いの表現として使用していることが分かった。これらのインタビューの内容から円形の切り方は、柔らかく、優しい印象を与え、その印象が母性イメージとして表現されたため、本研究では円形の切り方が多く使用されたと考えられる。まとめる

と、四角のように、尖ったり、角が存在する切り方より、丸い円形の方が柔らかく、優しい雰囲気を感じやすく、それが母性イメージとして繋がったため、円形の切り方が多く見られたと考えられる。

3. 中心性

切り抜きの構成について中心性を持っているか否かについて評定を行い、9名の評定者のうち、過半数の5名以上に選ばれた評定を採用した。その結果、20作品中、中心性が有る作品と無い作品の割合がそれぞれ50%であった（表3）。

杉浦（1992）の研究で中心性が見られた成人のコラージュ作品は28.1%で、中心性のある作品は幼児から高校まで、学年が上がるに従い増加し、大人で少し減少した。この傾向は滝口ら（1999）のコラージュ作品の発達の研究においても同様に見られた。また、成人の具体的な割合は示していないものの、滝口ら（1999）が示した中心性に対する結果のグラフからすると、10%前後を示し、中心性が有意に少なかった小学校4年生と近い結果を示していることが確認できる。これらの研究から、幼児から学年が上がるに従い、中心性のある作品の出現は多くなるが、大人からは減少する傾向があることが言える。また、その割合としては、どちらの研究も30%を超えていない。これらの結果からすると、本研究における中心性の出現の割合が50%であることは母性をテーマとしたコラージュ作品の特徴として注目して見る必要があると思われる。

コラージュ技法における台紙空間は心理的空間を投影する場である（中村、1999）。よって、治療場面でないところで表現された作品であっても、台紙の中心に置かれた切り抜きは、作品

表3 コラージュ作品の中心性

	中心性が有る	中心性が無い	計
人数	10	10	20
(%)	(50)	(50)	(100)

を理解するにあたって大事な情報を持っていると考えられる。それでは、中心性のある作品として評定された作品の台紙の中心にはどのような意味合いを持った素材が置かれたのだろうか、そして、中心性のある作品がこの研究ではなぜ多く見られたのだろうか。

中心性のある作品として評定されたのは、作品B, I, L, P, C, Q, T, N, O, Dの10作品であった。これらの作品の中心に置かれた素材とその意味内容、中心性があると評定した人数、そして最も母性を感じる切り抜きとして選ばれた作品の4項目について作品ごとにまとめた結果、表4の通りであった。その中で、評定者の全員に「中心性のある作品」として選ばれた作品B, I, Lを中心にみると、まず、作品Bでは、中心に貼った海について「ぐるぐる回っている海の中心から命が感じられる」と語っており、命が生まれるようなイメージが母性イメージに繋がったと語った。そして、その上に貼ったマリア像については、「包み込む包容力」を表しており、この切り抜きを最も母性を感じる素材として選んだ。また、制作後、母性について気づいた点として「自分の中で、命が誕生することが母性イメージに繋がっていることが分かった。」と語ったことや、タイトルが「命と包容力」であることからわかるように、この作品は母性を「命と包容力」という面から捉えていると考えられる。そして、それを表す切り抜きとして海とマリア像が台紙の中心に貼られていることが分かる。次に、作品Iでは、「自分の中で、丸く回っている中心に何かがあるイメージが母性イメージに繋がるため、魚がぐるぐる回っている海と、その中心に花を貼った」と説明し、これらの素材を最も母性を感じる素材として選んだ。このようなインタビューの内容から、この制作者にとって丸い円とその中心に何かあるイメージが母性イメージとして繋がりがやすいこと、そしてそれがこの作品のキーワードであることが分かる。作品Lでは、母性イメージとして一番に思い浮かんだものが料理であり、食べるためには皿がないと困

るため、土台のように大事な存在として皿を中心に貼ったと語った。また、この素材を最も母性を感じる素材として選んだ。このようなインタビューの内容から、中心に貼った皿の切り抜きは、制作者の中で土台のような大事な意味合いを持っていると共に、最も母性を感じる切り抜きであることが分かる。その他にも、中心に貼ったリネンの切り抜きについて、「白くて大きいリネンが大きな優しさの大元のような感じが」母性イメージに繋がったと説明している作品P（評定した人数8人）や、中心に貼ったロウソクに対して、「必要不可欠な存在である意味として母性イメージに繋がりました。」と語る作品C（評定した人数7人）などがある。

これらのことから、母性をテーマとした作品の台紙の中心には、制作者の中で母性を考える時に、キーワードとなる意味合いを持つ切り抜きや、最も母性を感じる切り抜きが置かれやすいことが言える。

それでは、なぜこのような大事な意味合いを持った切り抜きが中心に置かれ、それを他の切り抜きが囲むような中心性のある作品が、本研究では多く見られたのだろうか。「中心のあるイメージ」が母性イメージに繋がったと語られたインタビュー内容は、中心性のある作品として評定された作品（作品B, I, N, Q）のみならず、評定されていない作品においても（作品K, S）見られた。特に、中心性のある作品として評定された作品Iでは、「丸い形が母性イメージに繋がりがやすく、貼っていくのもこの中心を貼ってから周りが円になっているような感じで貼った」と語り、中心のあるイメージを切り抜きの構成においても使用していることが分かった。また、母性を考える時、「妊婦が大事そうに抱えている膨らんだお腹が思い浮かんだため、丸い形と臍のようにその中心に何かあるような形が自分の中で母性イメージに繋がったかもしれない」と語り、中心のあるイメージが母性イメージとして繋がりがやすかったと語っている。一方、本研究において、包まれるイメージが母性イメージに繋がったと語った制作者は

多かったが、そのイメージを構成において表現したのが作品Pである。作品Pの制作者に、真ん中にハムスターを貼った理由を尋ねたところ、「母性を表す周囲の切り抜きに囲まれて、それらに包まれているハムスターを表現しなかったため」であると語り、最も母性を感じる素材として選んだ。

これらの作品とインタビュー内容からすると、母性イメージに繋がりやすい「中心のあるイメージ」または、「包まれるイメージ」が切り抜きの構成にも影響を与えたため、中心とそれを囲み、包むような、中心性のある作品が本研究では多く見られたのではないかと考えられる。

まとめると、母性をテーマとした作品の中心には、一番母性を感じる切り抜きや、制作者の中でキーワードとなる切り抜きが置かれやすい傾向があることが分かった。また、本研究で中心性のある作品が多く見られた結果については、母性イメージに繋がりやすい「中心のあるイメージ」と「包まれるイメージ」が台紙の構成にも影響を与えた可能性があると考えられる。

VI. まとめと今後の課題

本研究は結婚や出産の経験がない青年期後期及び成人期の発達段階にいる未婚女性を対象に、「母性」をテーマとしたコラージュ制作を実施し、母性イメージがコラージュ作品にどのように表現されるのかについて調査を行った。なお、本稿においては、母性イメージを探るための第1歩としてコラージュ作品を通して表現された母性イメージの表現特徴を主な色彩、主な切り方、中心性の3つの形式的な側面に焦点を当てて、検討を行った。その結果、主な色彩においては、青が最も多く使用され、次に橙・白の順に続いた。本研究で青が最も多く使用された理由としては水との関連の素材が多く使用されたことと、青により、落ち着き、沈静、安息等、の感情を引き起こされ（松岡、1995）、それらの感情が母性イメージと繋がり、多く使

用されたと考えられる。次に多く使用された色は橙色であり、橙色は、先行研究では大人の表現特徴として、多くは使用されない色の一つである。しかし、本研究では2番目に多く使用されたことから、母性イメージの表現特徴として明らかとなった。橙色は、暖色系に分類され、温かい感じを与えられている。大山（1994）の調査では、橙色が連想されやすい単語として、家庭や愛、等が選ばれており、本研究により母性イメージにも結び付きやすいことが明らかとなった。また橙色の素材の多くはロウソクとライトなどであり、素材の特徴からも温かいイメージの表現が多く、このようなイメージや感覚が母性イメージと繋がりやすいことが考えられる。しかし、これらの多く使用された色彩はその素材の色だけで選択されたというよりは、素材の内容も選択に当たって大事な意味を持っており、これらの色が母性イメージを表す色であると考えるのは難しいであろう。

主な切り方においては、四角が一番多く見られ、その次に楕円を含めた円形が多くみられた。先行研究により、大人の一般的傾向として四角の切り方が多く出現することが明らかとなっており、本研究においても同じ傾向がみられたが、先行研究には使用頻度の低い楕円を含めた円形の切り方が本研究では四角の次に多く見られ、丸いイメージが母性イメージとして表現されたことが明らかとなった。

切り抜きの構成に関する中心性の分析においては、母性をテーマとした作品の台紙の中心に置かれる素材には、最も母性を感じられる素材や作品のキーワードとなる母性イメージが置かれやすい傾向が明らかになった。また、母性をテーマとしたコラージュ作品に中心性が多く見られた可能性として、母性イメージに繋がりやすい「中心のあるイメージ」と「包まれるイメージ」が台紙の構成にも影響を与えた可能性があることが分かった。

一方、母性イメージの表現としてどのような素材が用いられ、どのような母性イメージが表現されたかを分析することで母性イメージを探

ることが出来ると考えられる。そのため、次の研究では、使用された素材の分析を行い、使用された素材の意味合いや特徴に注目し、母性イメージを探ることを試みる予定である。

表4 作品ごとの中心の切り抜きとその説明

作品	中心性が有ると評定した人数 (全9人中)	中心に置かれた切り抜き	切り抜きの説明	中心に貼ったものが最も母性を感じる切り抜きとして選ばれた作品
B 命とか生命力	9	海と聖母マリア	海はお腹の中の子官のイメージ、そして、その中を魚がたくさん丸く回っているのは生命力が感じられ、お腹の中に命があるようなイメージです。マリア様は包み込む包容力、大きさのようなものを表しています。	○
I 母性の欠片	9	海とその中心に貼っている花	海の中に花があり、その花の周りをぐるぐる回っている魚がいる。このような中心が有ってその中心を回るイメージが母性イメージだと思う。	○
L 母なる大地	9	花が飾っている食器	母性というので、一番に思い浮かんだものが料理で、母がよく作ってくれる食事が洋食で、洋食を食べているイメージが繋がってこの食器を選んだのと、花が母性イメージとマッチして、また、花があることで無いよりは明るい母性のイメージがあって、真ん中に貼った理由は、お皿がないと食べられないので、土台のように大事な感じがしたからです。	○
P 優しさ、時間、理想	8	リネンのハンカチと寝ているハムスター	白いリネンの写真は、大きな優しさの大元みたいな感じで、優しさの中でも全部白だけじゃなくて、色んなものが混ざり合ったそういう大きな優しさというイメージです。ハムスターは優しい母性（リネンと周りの貼ってあるすべての素材）に包まれているイメージでまだ未熟で、守られないといけない存在、見守られているような感じ。	○
C 動物、自然、キャンドル…	7	ロウソク	暗闇からボワンと光りがある感じが、電気のように強い光りで自分の存在を主張しないけど、ボワンとその場所で明かりを照らしている、必要不可欠な存在である意味として母性イメージに繋がりました。真ん中に貼った理由は、周辺の動物を照らすイメージにしたかったためです。	
Q 優しさ	7	海と島	海は、色が優しい感じがし、海の中の島は、世間一般のお母さんのイメージで、偏見だけど、旦那さんが仕事に行って、ずっと住んでいたところから離れ、旦那さんの実家の近くに住んで周りに知っている人がいなく、一人で子育てしている孤立しているイメージ。	
T 愛	7	花	母というのは、育児をするには凛としてしっかりしていないといけないがあると思うんですが、白いお花って慈愛の心のようなイメージと、自立している女性であり、愛を持って私の目を癒してくれる感じがして、選びました。真ん中に貼った理由は、その凛とした一人の女性というのがあって、周りにその柔らかくて居心地よくて、人間がないと母性が無いかなと思って、お花ははじによけるのは違う気がしたためです。	
N 命	6	間欠泉	水がたまっており、湧き出てたまるように見えて、何かが生まれてくる感じがすると、海のように広がっているより、包まれてたまっている感じが良かったです。	○
O 母の愛の暖かさ	6	花	花は形が重なっていて、厚みがあるのと、優しい感じがして真ん中に花を貼りました。中心に貼った理由は、優しい物を中心に貼ったかったためです。	
D リラクッス	5	森	赤みのある暖かい感じと緑の静かなトーンが2つの母性を表していると思い、貼りました。	○

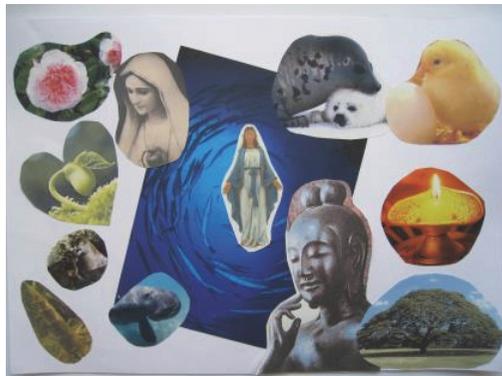
引用文献

- 池野谷美千代 (2007). コラージュ制作における女性性イメージに関する探索的研究——30代女性と中学生女子の制作を通して——. 東京国際大学大学院 臨床心理研究科修士論文.
- 今村友木子 (2001). 分裂病者のコラージュ表現——統一素材を用いた量的比較——. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 48, 185-195.
- 今関節子・行田智子・近藤好枝・真下由利子・金寿子・松岡治子・横田正夫 (1994). 青年期女子の母性イメージの特徴. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 15, 73-77.
- 石崎優子・石崎達郎・桂 戴作・織田正昭・日暮眞・原 節子 (1996). 母性性に関する心身医学的研究 (第1報) ——現代の日本人のもつ母性性のイメージについて——. 心身医, 36 (6), 468-474.
- 石崎優子・石崎達郎・桂 戴作・織田正昭・日暮眞・原 節子 (1996). 母性性に関する心身医学的研究 (第2報) ——心身症患者の母性性イメージ——. 心身医, 36 (6), 476-481.
- 磯田美深 (2004). 子どもを持つ女性の「自分」をテーマとした表現の研究 ——コラージュ母子同時制作と単独制作を通して——. 東京国際大学大学院 臨床心理研究科修士論文.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学. 青土社, pp. 24-40.
- 河合隼雄 (2009). ユング心理学入門. 岩波書店, pp. 70-78.
- 北原保雄 (2001). 日本国語大辞典第2版12 ほうほ～もんけ. 久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林 大・前田富禎・松井栄一・渡辺 実 (編). 小学館, p. 102.
- 松村恵子 (2005). 母性意識を考える. 文芸社, pp. 25-27.
- 松岡 武 (1995). 色彩とパーソナリティー——色で探るイメージの正解——. 金子誠司, pp. 90-132.
- 中村勝治 (1999). 現代エスプリ——コラージュ療法——. 森谷寛之・杉浦京子 (編). 至文堂, 386, 42-48.
- 西村喜文 (2015). コラージュ療法の可能性——乳幼児から思春期までの発達の特徴と臨床的研究——. 創元社.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究. 川島書店, pp. 245-247.
- 大山 正 (1994). 色彩心理学入門. 中央公論社, pp. 219-220.
- 新村 出 (2008). 広辞苑第6版. 岩波書店, p. 2589.
- 杉浦京子 (1992). コラージュ療法の基礎的研究 I ——表現特徴の発達に関するパイロット・スタディ——. 日医大基礎科学紀要, 13, 13-38.
- 杉浦京子 (1993). コラージュ療法の基礎的研究 II ——表現特徴の発達に関するパイロット・スタディ——. 日医大基礎科学紀要, 14, 11-34.
- 滝口正之・山本敏宏・岩岡眞弘 (1999). 現代エスプリ——コラージュ療法——. 森谷寛之・杉浦京子 (編). 至文堂, 386, 175-181.
- 寺田眞廣・今関節子・横田正夫・高田千恵子・田村文子 (1986). 女性の発達段階における母性イメージの推移. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 7, 115-130.
- 寺田眞廣・横田正夫・今関節子・田村文子・高田千恵子 (1987). 質問表と描画テストによる母性イメージの検討. 群馬大学医療技術短期大学部紀要, 8, 109-115.
- 魚住広之 (2008). コラージュ制作過程において, 素材を選ぶ・切ること. 東京国際大学大学院 臨床心理研究科修士論文.

付録



作品A 母



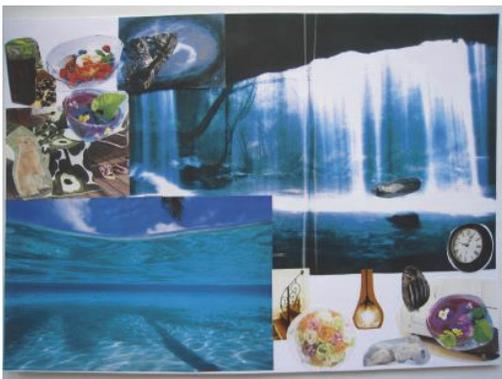
作品B 命とか包容力



作品C 動物, 自然, キャンドルと…



作品D リラックス



作品E 私の帰る場所



作品F お母さん



作品G 親と子



作品H 視線



作品I 母性の欠片



作品J あたたかさ



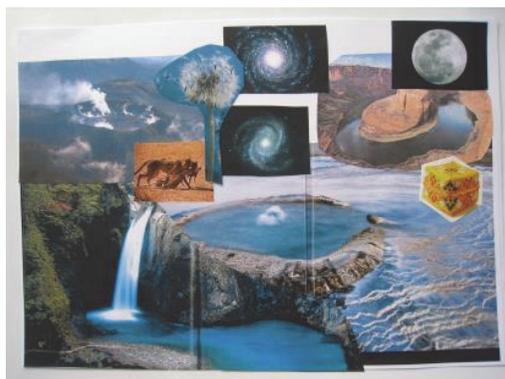
作品K 人類の創生と母性



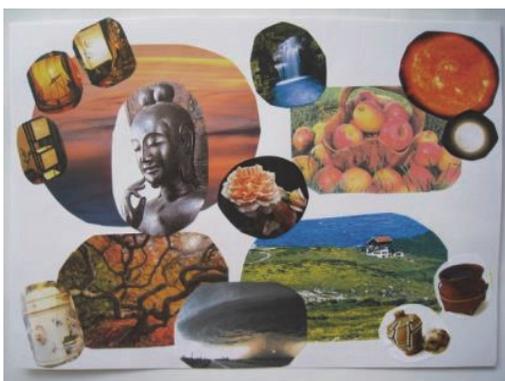
作品L 母なる大地



作品M お母さん



作品N 命



作品O 母の愛の温かさ



作品P 優しさ, 時間, 理想



作品Q 優しさ



作品R 理想



作品S表：愛



作品S裏：母なるもの



作品T 愛